

レビ系祭司職とイエスの祭司職との比較 (7章)

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) <u>ユダヤ教の三本柱と</u> 御子との比較	テーマ	1 : 1~3	
	<u>天使たちに優る御子</u>	1 : 4~2 : 18	警告① 2 : 1~4
	<u>モーセに優る御子</u>	3 : 1~6	
	第二の警告	3 : 7~4 : 13	警告②
	<u>アロンに優る御子</u> (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子) 注①	4 : 14~10 : 18	警告③ 5 : 11~6 : 20
	勧めのための 2 つの基盤と 4 つの勧め、警告、励まし	10 : 19~39	警告④ 10 : 26~31
第二区分： 適用 (御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	生きた信仰の証明	11 : 1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12 : 1~29	警告⑤ 12 : 25~29
	まとめとしての勧め	13 : 1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■アロンに優る御子 (4 : 14~10 : 18) の展開 (清水私見)

結論と中心的適用		4 : 14~16
↓		
	想定される質問	答え
1	イエスは、大祭司になることができるのですか？	5 : 1~10
	第 2 段落前に読者の靈的受容力を整える。第三の警告と勧め	5 : 11~6 : 20
2	メルキゼデクの位に等しい大祭司とは何ですか？	7 : 1~10
3	なぜ、レビ系とは別の大祭司が立てられるのですか？	7 : 11~25
4	では、キリストは天で犠牲を捧げているのですか？ (中間的なまとめ)	7 : 26~28 8 : 1~6
5	「さらにすぐれた契約」とは何ですか。初めの契約 (モーセの律法) には欠けがあったのですか？	8 : 7~13
6	初めの契約には、どのような欠けがあったのですか？	9 : 1~14
7	それでは、旧約の聖徒たちはどうなるのですか？	9 : 15~22
8	初めの契約において幕屋とその器具に犠牲の血が注がれました。 同様にキリストは天の聖所にご自身の血を注いだのですか？ (参照、レビ 16 : 16)	9 : 23~28
9	モーセの律法は、まだ有効か、それとも無効なのですか？	10 : 1~9
10	罪のためのささげ物は、必要ですか。それとも不必要ですか？	10 : 10~18

イエスの祭司職

モーセの律法との関係

□前回の復習と今回の内容

1. 「アロンに優る御子」の冒頭で述べられるのは、結論と中心的な適用（4：14～16）
 - (1) 結論・・・「私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられる」（4：14）
 - ① もろもろの天を通った=第一の天、第二の天を通り、第三の天に入って、天の聖所に入られた
 - ② 神の子イエス・・・神の子：神性、イエス：人性 ⇒ メシアは神・人である
 - ③ 御子は人となって、私たちと同じように試みに会われた。だから、私たちの弱さに同情できるお方である（4：15）
 - (2) 中心的な適用・・・「私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこう」（4：16）⇒ 第二区分「適用」の書き出し 10：19「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができます」
2. 読者が4：14～16を読んで思い浮かべるのは、「ダビデの子孫、すなわちユダ族から出るメシアであるイエスが、大祭司になることができるのでしょうか？」と想定される。
3. 著者は読者のこの想定質問に対して、5：1～10において「イエスは神によってメルキゼデクの位に等しい大祭司になられた」と説明する。
4. その次には「メルキゼデクの位に等しい大祭司とはどういうものか」という説明に進むところであるが、その前に読者の靈的受容力を整えるために、5：11～6：20において「第三の警告と勧め」が語られた。
5. 本日の内容は、メルキゼデクの位に等しい大祭司とはどういうものか、さらに、なぜレビ系祭司職とは別の大祭司が立てられるのか、という説明である。

■メルキゼデクの位に等しい大祭司とは何ですか？（7：1～10）

1. メルキゼデクに関する記事
 - (1) 創14：17～20（アブラハムと同時代の人物であった）
 - (2) 詩110：4（メシア預言の中で言及される）
2. メルキゼデクは人である
 - (1) ヘブル7章3節「父も母もなく、系図もなく、その生涯の始めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司にとどまっている」、8節「彼は生きているとあかしされている」とある→ メルキゼデクは、「主の使い（単数）」と同様に、子なる神、すなわち受肉前のキリストが現れた？ 次の5つの理由から、否である。
 - ① 文法上の理由：「その生涯の始めも、いのちの終わりもなく」、「神の子に似た者とされ」は、分詞構文が使われている。メルキゼデクが事実そういう人物であれば形容詞を使うところを、分詞構文にしているのは、メルキゼデクが聖書の記録上では誕生や死亡の記事がないという点で、神の子に似ているという説明であるため。
 - ② 「神の子である」とは言っていない。「神の子に似た者」である。しかも「・・・とされた」、すなわち①と合わせて言い換えると、「神の子に似た者として旧約

聖書に書かれた」ということである。

- (3) 詩 110:4 では、メルキゼデクとメシアは明確に区別されている。
 - (4) ヘブル 5:1 では、祭司の資格は、「人であること」。受肉前のキリストは、人ではないから、祭司になることはできない。
 - (5) 旧約聖書での「主の使い」は、突然現れ、また姿を消す。長期間の職務に就くことはない。メルキゼデクは、サレムの王として統治する立場にあったわけであるから、長期間継続してその職務にあたらねばならず、「主の使い」の現れ方とは異なる。
- (2) よって、ヘブル 7 章 3 節と 8 節は、メルキゼデクが旧約聖書の記録の上で、イエスに似た者とされるような記録の仕方がされていることを説明している。メルキゼデクは、人である。

3. メルキゼデクとイエスの類似性

- (1) 1 節 類似性 I = 王であり祭司である
 - ① メルキ・ツェデク メルキは「義」という意味。ツェデクは、エブス人の王朝の王の呼称(ヨシ 10:1)。よって、その名を訳すと「義の王」(7:2)。
 - ② サレム(平和) = のちにエルサレム(神の平和)となる地 先住民はエブス人
 - ③ すぐれて高い神の祭司 = 真の神に仕える祭司
 - ④ 2 節は、メルキゼデクの統治の特徴が義なる統治と平和な統治であったことを示す(→メシアの統治 イザヤ 9:6~7)
- (2) 1 節 類似性 II = メルキゼデクはアブラハムを祝福し、イエスは信者を祝福する(イエスによる祝福の詳細は 7 章後半にて)
- (3) 1 節 類似性 III = アブラハムより上位である
 - ① 1 節 メルキゼデクはアブラハムを祝福した。7 節 上位の者が下位の者を祝福する。よって、メルキゼデクは、アブラハムより上位である。
 - ② 2 節と 4 節 アブラハムはメルキゼデクに戦利品の 10 分の 1 を分け与えて、自分よりもメルキゼデクが上位であることを認めた。10 節 そのとき、レビはアブラハムの腰の中にいた。よって、メルキゼデクの祭司職は、レビ系祭司職より上位である。
 - ③ イエスは、メルキゼデクの位に等しい祭司職であるから、アブラハムより上位であり、またレビ系祭司職より上位である。
- (4) 3 節 類似性 IV = 系図に基づかない(レビ系では系図が重要、エズ 2:61~62)
- (5) 3 節 類似性 V = 「いつまでも祭司としてとどまっている」時間の制約を受けない
 - ① レビ族の男子が幕屋(神殿)での務めに就く年齢は、25 歳から 50 歳までの期間(民 8:24~25)。大祭司は 30 歳以上で就任、終身(死ぬまで)。
 - ② 聖書には、メルキゼデクが死んで、その祭司職が別の者に引き継がれたという記録がない。聖書の記録上は、メルキゼデクの祭司職には終わりがない。イエスの永遠の祭司職の「型」として、メルキゼデクの記事がある。

4. レビ系祭司職に対する優位性

- (1) 4~5 節 優位性 I = 前もって何の契約も取決めもないのに、アブラハムから 10 分の 1 を受けた。レビ族の場合は律法で定められて 10 分の 1 を受け取る。

- (2) 6～7節 優位性II=アブラハムを祝福した。アブラハムによって地上のすべての民族は祝福を受ける（創12:3）、そのアブラハムを祝福できる人は他にはいない。
- (3) 8節 優位性III=死んだという記事がない→別の人へ継承する必要がない。
- (4) 9～10節 優位性IV=レビはアブラハムを通して10分の1をメルキゼデクに納めた→メルキゼデクの祭司職は、レビ系祭司職よりも上位である。

■なぜ、レビ系とは別の大祭司が立てられるのですか？（7:11～25）

1. レビ系祭司職は不完全であるので、新しい祭司職へ代わった（11～19節）

- (1) 11節 レビ系祭司職は、モーセの律法の基礎
 - ① 人は完全に律法を守ることはできない。
 - ② 動物の犠牲の血で罪をおおい、一時的に神との交わりを回復する。
 - ③ よって、モーセの律法は、レビ系祭司職が動物の犠牲をささげる祭儀を前提に与えられたものである。
 - ④ 神との調和ある関係の回復は一時的であり、その意味で祭儀は不完全である。
- (2) 11節 レビ系祭司職では不完全であるから、新しい別の祭司職が立てられる。
- (3) 12節 祭司職が変わるということは、律法も変わることになる。
- (4) 13～14節 イエスは、レビ族ではなく、ユダ族から出た。レビ族以外から祭司が出るとは、モーセの律法にはない。
- (5) 15～16節 ユダ族から出たイエスは、モーセの律法にはよらず、「朽ちることのない、いのちの力」=死からの復活によって、メルキゼデクの位に等しい、別の祭司として新しく立てられた。イエスは、永遠に生きておられる、永遠の祭司である。
- (6) 17節 詩110:4の引用。この預言は、モーセの律法の時代の中において、ダビデが預言したものである。メシアは、レビ系祭司職ではなく、とこしえにメルキゼデクのような祭司である。メシアは、王であり祭司であるお方である。
- (7) 18～19節 モーセの律法は廃止され、さらに優れた希望として大祭司イエスが立てられた。私たちは大祭司イエスを通して神に近づく。

2. 新しい祭司職は、旧い祭司職よりも優れている（20～25節）

- (1) 20～22節 ここも詩110:4の引用。イエスは、神の誓いによって、祭司とされた。その結果、「さらにすぐれた契約」=新しい契約の保証となられた。【新しい契約については、8章で詳しく扱われる】
- (2) 23～25節 メシアは永遠に存在し、交替することはない。ご自分によって近づく信者を完全に救うことができる。いつも彼らのために、とりなしをしておられる。

■では、キリストは天で犠牲を捧げているのですか？（7:26～28）

1. 26節 メシアは、罪も汚れもないお方である。復活後、父なる神の右の座に上げられた。このような大祭司こそ、私たちに必要なお方である。
2. 27～28節 罪人という弱さをもつレビ系祭司職は、まず自分の罪のために、その次に民の罪のために毎日動物の犠牲をささげる。メシアにはその必要はない。十字架でご自身を完全な犠牲としてささげ、ただ一度でこのことを成し遂げた。
3. 28節 御子は、神の誓いによって、永遠に完全な大祭司とされている。